

主筆 牧野富太郎

植物研究雜誌

第五卷

第四號

(通卷第
四十號)昭和三年四月二十五日
東京津村研究所發行

○日本デ始メテ出來タ植物學術語ノ辭書

牧野富太郎

ドノ科學デモ術語 (Technical Term) ト云フモノガアルガ植物學デモヤハリ同様デアル、我日本デ其植物ノ術語ヲ集メテ其字引ヲ拵ヘ之レヲ始メテ出版シタノハ今カラ五十四年前ノ明治七年デアッテ其書名ハ『植學譯箋』デアアル、四六版ノ小冊子デ序文ナドヲ別トシテ二十七頁カラ成ツテ居ル、此書ハ當時博物局ニ在勤シテ居ッタ小野職懋氏 (彼ノ有名ナル本草家小野蘭山ノ直系後裔) ガ譯シテ編成シタモノデ田中芳男氏ガ之レヲ校閲シ文部省デ發行シタモノデアアル、此當時小野氏ハリンドレー (John Lindley) 氏著ノ「スクール、ボタニー」ト云フ書ヲ抄譯シ『植學淺解』(美濃紙判和本一冊) ト題スル書ヲ編ンデ此レモ同ジク明治八年 (緒言ハ明治六年ニ書カレテ居ル) ニ至テ文部省デ出版シタガ此時分ニ其書並ニ他ノ書カラ其術語ヲ蒐メテ此『植學譯箋』ヲ編成シタノデアッタ即チ是レガ我邦デ始メテ出來タ植物學術語ノ字典デアアル、今其書編成ノ由來ヲ知ル爲メニ左ニ其卷頭ニ在ル緒言ヲ掲ゲテ見ヤウ

「植學譯箋」緒言

頃日英人リンドレー氏所著ノ學校本草ヲ譯シ傍ラ二三ノ書ヲ校讎シテ植學淺解ト名ケ上梓近キニアラントス而シテ植學ニ關スル字類ヲ輯メ對譯ヲ下シ之ヲ卷尾ニ附シ譯例ノ考據ニ供セントス然ルニ我邦植學ノ譯書甚少ク其譯例ノ如キモ亦知ル者稀ナレバ之ヲ淺解ノ卷尾ニ附シ置ンヨリハ一小冊子トナシ後ノ植學書ヲ

日本デ始メテ出來タ植物學術語ノ辭書

讀ム者ニ便センニ如ズト因テ別ニリンネウス氏デ、カンドルレ氏ミケル氏等ノ本草書ヨリ數語ヲ増補シ遂ニ植學譯簽ト名ケテ刊行ス其原字ハ羅旬語英語並羅旬語ノ語尾ノ變ジテ英語トナリシモノ、三種ニシテ譯字ハ漢譯植物學植學啓原等ノ諸書ニ據リ又從來漢譯ナキモノニハ新ニ譯字ヲ填メ且漢名ノ不詳モノハ己ムヲ得ズ俗語ニテ譯シ△ノ符號ヲ記シテ之ヲ分ツト雖ドモ願フニ其譯妥當ナラザルモノ多カルベシ識者請フ之ヲ訂正セヨ

明治七年四月

譯者 識

田中芳男 閱

小野職懋 譯
久保弘道 校

植學譯簽

明治七年五月

文部省

扉 (縮圖)

文中ニリンネウス氏ノ書ヲ參考シタ様ニ見エテ居レドモ之レ

緒言ハ右ノ通りデアル、其時分ハ明治ノ初年デ植物學ノマダ餘リ開ケナイ時代デアルバカリデナク元來ガ本草學者ノ小野氏ガ多少ノ英語ヲ解シテ少シノ新知識ヲ蓄ヘタ頭腦デ編纂シタモノデアルカラ其時分ノ潮流ニ漂ヒ「ボタニー」ヲ本草、又「ボタニー」ノ書ヲ本草書ト書テ少シモ怪マヌ有様デアッタ(元來「ボタニー」即チ植物學ト本草トノ意味ハ大變違フ)又此時代ニ植學ト謂ヒシハ植物學ノ事デ此植學ナル譯語ハ和製デソレハ宇田川榕菴著ノ『植學啓原』ト云フ書カラ出タモノデアル(本誌第一卷第一號「植學ノ語ハ日本ニテ作り植物學ノ語ハ支那ニテ製ス」ノ文參照)又右ノ緒言ハ決シテ彼ノリンネウス氏ノ直接ノ自著(ソレハ

其當時小野氏ノ周圍ニハソンナ書ハ一切持合セガ無カッタ事ヲ私ハ保證シタイ)ヲ見タモノデナクソレハ當ニ
 ホッタイン (F. Houttuy) 氏著ノ博物學 (Naturalyke Historie) ノ一書ヲ指シタモノデアラネバナラヌト思

(13)

Jointed.	接ぎ (獨へ)
Juglandaceae, — deae	胡桃科
Juncaceae.	蘆花科
L.	
Labiata.	輪形 (花葉)
Labiatae.	輪形科
Lamina or Blade.	線片
Lanceolate.	披針狀 (線又葉、葉)
Lardizabalaceae, — bal- cae.	木通科
Lauraceae, — rineae	樟科
Leaf.	葉
Legume or Pod.	莢豆殼
Leguminosae	豆科
Lemnaceae.	浮萍科
Lentibulariaceae, or utr- iculariae.	狸藻科
Lenticular.	扁豆形
Lepidote.	鱗鱗科
Lichenes.	地衣科
Ligula	小舌

書中ノ一頁 (縮圖)

「卷末ノ言」參照)
 右『植學譯箋』ガ公刊セラレテ後十二年目ノ明治十九年ニ當時東京帝國大學理科大學ノ植物學助教授松村任三氏著ノ『植物學語鈔』ト云フ小冊子 (東京、丸善商社出版、五十四頁、紙表紙、洋紙半菊判本) ガ出デ、次ニ明治二十四年ニ大久保三郎、齋田功太郎、染谷徳五郎三氏共著ノ

『植物學字彙』(東京、丸善株式會社出版、全部三百六十頁餘、布表紙、四六判)ガ發行セラレタ其レ以來今日マデ三十七年ヲ經ルモ未ダ單行本トシテ此種ノ字引ハ出來テ居ナイ、私ハ從來ノ各樣ナル一切ノ譯語ト其出典トヲ悉ク網羅シタ植物學ノ辭典ヲ自ラ編成シテ見ヤウト平素希望シテ居レドモマダ其機會ヲ得ナイデ居ルガ早晩之レヲ實現サセテ見タイト思ッテ居ル、此ニ其最初ノ字引タル『植學譯箋』ノ扉ト其内容ノ一頁トヲ掲ゲテ其黎明期ノ當時ヲ偲ブコト、スル、今日我ガ植物學界ノ人々デモ此時代ニ此ンナ書ノアッタ事ヲ知ッテ居ル方ハ

多クハアルマイト思フ

序デニ述ベルガ小野氏ガ右『植學譯箋』ヲ編シタ當時 Ovary ヲ誤テ胚珠トシタ、其レハ當時小野氏ガ胚珠ト云フ者ハ元來如何ナル部分ノ名デアアルカラ能ク究メ得ナカッタニ坐スルモノデアッタ、然シソレガ其儘世間ニ流布シテ今日一般ニハ Ovary ガ胚珠デアルトシテ誰シモ之レヲ怪ム者ガナク皆得タトシテサウ用キテ居ルガ實ハ此胚珠ノ語ハ元ト支那ノ咸豐七年(我安政四年)ニ同國デ出版シタ漢文ノ『植物學』ト題スル書カラ出タモノデ同書デハ其レガ Ovary ノ心體ナル Nucellus (今日謂フ珠心)ノ名デアッタ決シテ Ovary 其モノ、名デハナクソシテ Ovary ハ卵ト名ケラレテ居タノデアアル、私ハ嘗テ本誌ノ第一卷第一號デ「胚珠是カ卵子非カ」ト題シテソレヲ詳説シテ置イタカラ就テ參照セラレタイ、世人ハ一般ニ上ノいささつヲ知ラズニ小野氏ノ誤認ヲ襲イデ Ovary ニ胚珠ノ字ヲ充當使用シ居ルノハ之レガ委曲ヲ知ッテ居ル人カラ見ルト頗ル情ケナク感ズル、私ハ假令ヒ一時ノ不便ハアツテモ是非トモ是レハ植物學者ガ一致協力シ翻然トシテ訂正スベキモノダト思フ今日ノ植物學者モソレ位ナ敢爲斷行ノ氣象ガアツテ欲シイ、醫學藥學ノ方面デ今日廣ク用キラレツ、アル下山順一郎博士著、柴田桂太博士增訂ノ『藥用植物學』デハ Ovary ガ卵子トナッテ居ルノハヒドク嬉シイ此名ハドウカ何時マデモ貫イテ用キタイ、ソレハサウスルノガ正當デアアルカラデアアル

○蕾軒獨語 (其二十)

蕾軒 朝比奈泰彦

○はひいろかぶとけ(新稱) はひいろかぶとけト Lobaria scrobiculata DC. ニ命ジタル和名デアアル、コノ地衣ハ歐洲、北米、亞細亞ニハ普通ナ大形地衣デアアルガ今日迄吾邦ニ産スルコトハ何處ニモ記載ガナイノデアアル然ルニ昨年(昭和二年)十月二十五日信州八ヶ嶽ニ於ケル岡田喜一郎君ノ採集品中ニ此地衣ヲ見出スコ